

# 平成21年度 第3回サンゴ礁 保全行動計画策定会議 議事要旨

【日時】平成21年11月16日（月）10：00～12：00

【場所】経済産業省別館11階 1111号会議室

## 【議事次第】

1. 開会
2. 挨拶
3. サンゴ礁保全行動計画（案）の検討
  - （1）資料説明
  - （2）意見交換
4. 閉会

## 【配布資料】

- 資料1 平成21年度サンゴ礁保全行動計画 作成スケジュール  
資料2 サンゴ礁生態系保全行動計画  
～豊かな地域社会を実現する健全な自然環境の継承を目指して～（案）  
資料3 サンゴ礁生態系保全行動計画（案）の概要

## 【出席者】

### ○委員（◎は座長）

岩瀬 文人	財団法人 黒潮生物研究財団 専務理事
鹿熊 信一郎	沖縄県 八重山農林水産振興センター 主幹
土屋 誠	琉球大学 理学部 教授
寺崎 竜雄	財団法人 日本交通公社 観光調査部 部長
中野 義勝	琉球大学 熱帯生物圏研究センター 瀬底研究施設 技術専門職員

◎灘岡 和夫	東京工業大学大学院 情報工学研究科 教授
林原 毅	独立行政法人 水産総合研究センター 遠洋水産研究所 外洋資源部 外洋生態系研究室 主任研究員
日高 道雄	琉球大学 理学部 教授

古川 恵太 国土交通省 国土技術政策総合研究所  
沿岸海洋研究部 海洋環境研究室 室長（欠席）  
安村 茂樹 財団法人 世界自然保護基金ジャパン自然保護室 主任  
山野 博哉 独立行政法人 国立環境研究所 地球環境研究センター  
衛星観測研究室 主任研究員

○関係省庁

<環境省>

星野 一昭 環境省 自然環境計画課 課長  
荒牧 まりさ " " サンゴ礁保全専門官  
滝澤 玲子 " " 主査  
小林 靖英 " 九州地方環境事務所 那覇自然環境事務所  
国立公園・保全整備課 自然保護官

<内閣府>

久保 大輔 内閣府 政策統括官（沖縄政策担当）付企画担当参事官付  
参事官補佐  
佐藤 将由 内閣府 沖縄振興局参事官（特定事業担当） 主査

<国土交通省>

谷 幸治 国土交通省 総合政策局 海洋政策課 係長  
逢坂 謙志 国土交通省 河川局 海岸室 企画専門官  
安原 克彦 国土交通省 航空局 計画課 環境影響評価係長  
草野 真一 国土交通省 港湾局 国際・環境課 係長（欠席）

○関係自治体

玉城 正博 沖縄県 文化環境部 自然保護課 主査

○事務局

木村 匡 財団法人 自然環境研究センター 主席研究員  
鈴木 隆 " 上席研究員  
日比野 浩平 " 主任研究員  
森本 直子 " 研究員

【議事要旨】

1. 開会
2. 挨拶

- 挨拶（環境省自然環境計画課 星野課長）

### 3. サンゴ礁保全行動計画（案）の検討

#### （1）資料説明

- 資料説明（荒牧サンゴ礁保全専門官）

##### ➤ 資料 1

今日のコメントを踏まえて 12 月中に修正や関係者との調整を図り、1 月からパブリックコメントで幅広い意見募集を行いたいと考えている。さらに、その期間に合わせて統合的沿岸管理分科会を開催して、地域住民との意見交換の場を持ち、そのあと 2～3 月上旬までに第 4 回サンゴ礁保全行動計画策定会議を開催し、最終的な承認を得たい。

##### ➤ 資料 2 [詳細については、資料を参照]

##### ➤ 資料 3

行動計画の構造を整理したので、参考として紹介したい。

#### （2）意見交換

- 第 7 回統合的沿岸管理分科会で示された行動計画（案）からの大きな変更点

- 4. 「具体的な行動計画」で、すぐに実行することが難しい取組や今後やっていくことが望まれる取組などを別途整理すべきとの指摘があったので、「現状と課題」と「具体的な取組」の間に新たに「取り組みの方向性」という項を加え、整理し直した。また、特に地域での普及啓発・環境学習の重要性や持続可能な観光利用などの部分では、調和型地域づくりの観点をさらに盛り込めるよう修正を加えた。

- 1. 「背景」について

- より多くの人に理解してもらえるよう、(1) 「サンゴ礁生態系の価値」3 行目の「生物多様性」のところに、「なぜ生物多様性が重要か」という説明を追加すべきである。

- 2. 「行動計画の目標及び対象」について

- 5 年後に、この行動計画の総括はどこに報告されるのか？例えば、生物多様性国家戦略に反映されていくのか？また、「サンゴ礁生態系保全連絡会議（仮称）」に関してはどうか？

→ まずは、「サンゴ礁生態系保全連絡会議（仮称）」において公開の形で点検・見直しを行い、その結果を次の計画に反映させていく。生物多様性国家戦略においても、その見直しの際に、行動計画の進捗を踏まえながら順次反映させていきたいと考えている。

- 点検は、どのような観点で行うのか？

→ 数値目標等がある方が分かりやすいとの指摘があったが、全体像の中でどのよう

な数値目標を設定するのが適切なのか、今の段階で示すのは難しい。「具体的取組」にある取組の進捗を点検しながら、適切な数値指標の検討を同時並行で行っていききたい。

- (1)「目標」では「保全」「再生」「利用」の三つが並んでいるが、例えば3.「基本方針」1行目では「保全」「利用」の二つだけになっている。「再生」という言葉は、意図して外されているのか？  
→ 「保全」の概念の中に「再生」を含んで考えていたときと、別途言及していたときがあったためである。整理したい。

### ● 3.「基本方針」について

- 2では「NGO」、3では「NPO」という言葉が使われているので、整理した方がよい。
- (1)「サンゴ礁生態系保全調和型社会の形成」の最後の「独自の文化」は、伝統的な文化と誤解されかねない。目指している将来像だと分かるよう、修正した方がよい。
- (2)「連携と協働」の第二段落には、流れとして、省庁間の連携の話が来るべきである。今後、省庁間の連携をどう進めていくかを、もっとアピールした方がよい。
- (2)には教育関係者との連携とあるが、以降で、その具体的な取組が書かれていない。  
→ 4.(1)③「普及啓発・人材育成」に、取り組むべき内容をいくつか挙げている。課題として、将来的に入れ込んでいきたいと考えている。  
→ その③の「取組の方向性」に、加えてもよいかもしれない。協議会においても、学校教育は、大きなステークホルダーになりうる。
- (2)の最後の「アジア・オセアニア地域」は、圧倒的に人口圧力が高く、貧困層が大きく依存している裾礁である。利用との調和が重要な海域であることを、簡単に言ってほしい。

### ● 4.「具体的な行動計画」の(1)「サンゴ礁生態保全の基礎となる取組」について。

- ①「調和型地域づくりのための連携の促進」の「現状と課題」第二段落「それぞれの」以降には、サンゴ礁を保全しようという社会的コンセンサスをつくるという話、あるいは、利益が相反する場合には、「具体的取組」で発生源対策を提示している環境省・農林水産省・国土交通省で対策を決めるという話があるべきだと思う。最終的な目標は、水質基準をつくる等の陸域からの発生源対策に行くべきだと、私は考えている。  
→ 陸域からの汚染対策は、(3)②「陸域とのつながりを考えた統合的な管理」のところで整理をしたが、指摘のとおり、保全の重要性に対する社会的なコンセンサスをつくることの重要性については、ここで触れておきたいと思う。  
→ 「保全活動に関わる人々」は、ボランティアで清掃活動をしている人々など、狭義の意味に捉えられる恐れがある。良好な生態系・資源を適正に管理・保全することは、地域全体にとってプラスになるという主旨だと思うので、「保全活動に関わる人々」と限定する必要はない。

- ①の「取組の方向性」第二段落の「社会基盤整備の取組の～計画・実施する」にある「サンゴ礁」は、「サンゴ礁生態系」とすれば、サンゴ礁海域に限らず、藻場・干潟・マングローブなどの生態系サービス機能を積極的に評価・利用するということろまで、広げられると思う。
- 地域の連携は①の中で書かれているが、3.(2)「連携と協働」にある各省庁間の連携・協働に対する取組は、見当たらない。
  - ①の「取組の方向性」第一段落の最後に「国レベルにおいて～」と入れ、それを受けて、「具体的取組」に「サンゴ礁生態系保全連絡会議（仮称）」の開催等を書き込んでいる。
  - 「～などが参加する「サンゴ礁生態系保全連絡会議（仮称）」を開催し」のように、今の時点で加わるべき主体を書き加えれば、その懸念が解消されるのではないか。
- ①では、調和型地域づくりのための連携の促進に資するであろう連絡協議会的なものをつくるだけで、目標が担保されると書かれているように読める。
  - 社会経済活動とサンゴ礁生態系をつなげる取組は、まずは適正な利用を図り、社会的な価値を位置付けていくことだと考えているので、例えば次のステップとして、適切な利用のさらなる推進が必要であることを、「取組の方向性」第二段落で書いている。
- ②「国際的取組」の「取組の方向性」が弱いように思う。気候変動の話はこの3行にしかななく、また、「サンゴ礁生態系の回復力の向上を考慮に入れた」の部分は、読み手は具体的にイメージできないと思う。
  - 温室効果ガスの削減に関しては、大きな枠組みの方が合ってくる。回復力の向上は、陸域の汚染をなるべく抑えるなど、後半の様々な取組とつながっていくものと認識している。
  - サンゴ礁生態系は、グローバル及びローカルの複合的な環境ストレスを同時に受け、その影響を最も鋭敏に表しているシンボリックな生態系である。そのため、段落の前半では、使命として我々が積極的に世界に対して発信していくべきだというスタンスを述べるべきだと思う。回復力に関しては、例えば、場所を限定して守るのが効果的であること等の具体例を記述して、分かりやすくした方がよい。
- ②の「具体的取組」も弱いように思うので、もっと積極的に世界と連携して保全のために取り組むという姿勢を示した方がよい。研究者・研究機関は、それぞれにいろいろなつながりを持っているので、それらの情報を集めれば、今後のネットワークづくりや活動に役立てられるのではないか。
- ③「普及啓発・人材育成」の「取組の方向性」第三段落2行目「ガイドの技術」は、「ガイドの技術の向上」の方がつながりがよい。また、事業者が、ガイドや社員、旅行者に伝えるとあるが、事業者自身に対する意識啓発も、加えた方がよい。
- ④「情報の収集・発信及びその体制の整備」の「具体的取組」三つ目。これまで環境

省で取り組まれてきた「自然環境保全基礎調査」や「モニタリングサイト1000」などの結果から目標設定できるものがあると思うので、ぜひ加えてほしい。もしなければ、今後充実させていかねばならない課題を、「現状と課題」に書き込んでほしい。

- ④の「現状と課題」5行目「現状の評価を行った」の部分に、他と同様、根拠となるURL等を掲載してほしい。また、モニタリングは、そのデータをもとに現状の保全策を考えられるだけでなく、保全計画を実施する際に、それが本当に効果的だったかどうかを検証するツールにもなる。そのため、その両者の重要性、特に後者の部分を、ぜひ書き加えてほしい。

● 4.(2)「持続可能なサンゴ礁生態系の利用」について。

- 水産庁はいろいろな制度で資源管理を行っているが、その予算は年々削られている。そのため、①「生物資源の適正な管理と利用」の「具体的取組」の三番目に、「サンゴ礁海域における水産資源管理を進めます」、あるいは「支援します」、あるいはその両方の言葉を入れてもらえればと思う。また、東京都はサンゴ礁を有する小笠原と沖ノ鳥島を含むので、できれば「具体的取組」に、「東京都」の記述を加えてほしい。
- ①の「取組の方向性」第三段落は、藻場がだめならサンゴ礁に移行すればよいというように受け取られる恐れがあるので、誤解を与えない書き方にした方がよい。
- ①の「現状と課題」第三段落は、主旨が不明瞭に感じる。かつての里海は、人口増加で漁獲圧が大幅に増加し、著しく衰退した。一般的に、その現実には直視せず、里海的なことをやろうという非常に短絡的な論調になりがちだが、ここでは、新しい時代の里海をどのように実現するのかという戦略論につながるような議論を展開すべきだと思う。段落全体を書き換えてほしい。

● 4.(3)「サンゴ礁生態系の保全・再生」について。

- ①「重要地域の設定と管理」の「具体的取組」の最後の二つにウミガメや海鳥類の記述があるが、ジュゴンや鯨類などの広域移動性動物も、サンゴ礁生態系を繁殖地や餌場として利用している。整合を取るため、それらの記述を追加した方がよい。
- ①の「現状と課題」第三段落2行目の「多くは」は、「残りの（指定されている保護地域以外の）多くは」ではなく「保護地域の多くは」という意味ならば、「その多くは」などとした方がよい。
- ②「陸域とのつながりを考えた統合的な管理」の「現状と課題」2行目の「マングローブ林などの汽水域まで」は、リュウキュウアユなどの両側回遊魚や甲殻類などの生活史を考えると、「河川まで」とした方がよい。
- ②の「現状と課題」第二段落の「沖縄県など」は不要である。

● その他

- 当初想定していた 10 ページを超え、20 ページ近くにまで増えている。委員の了承なしに文章を削るのは非常に難しいので、減らす作業にも力を注いでほしい。
- 計画の普及を図るために、ぜひパンフレットをつくってほしい。A3 両面で、折りたたむと A4 で 4 ページのもので、サンゴの写真や絵などを入れて見やすくする。
  - 英語版はつくるのか？
  - どちらも今年度の範囲では難しいと思うが、来年度以降、検討したい。
- 「5 年間あります」ではなく、「5 年しかない」と思う。書いてあることは非常に多く、とても 5 年間では解決できないような印象を受ける。そのあたりの姿勢・考え方は、どうなっているか？
  - 来年以降、まさに点検していきたいが、まずは、このような大きな問題に着手するのが最初だと考えている。来年度以降、その先の予算要求なりも考えていきたい。

#### 4. 閉会